音なし源捕物帳

遺作時代推理小説

笹沢左保

連作時代推理小説

音なし源捕物帳

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

連作時代推理小説　**音なし源捕物帳**　¥980

昭和54年2月25日　初版1刷発行

著者　笹沢左保
東京都小平市小川東町2028
発行者　小保方宇三郎
印刷者　堀内文治郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2　振替 東京6-115347　株式会社 光文社　電話 東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　(関川製本)
© Saho Sasazawa 1979

(分)0-0-93(製)92049(出)2271 (0)
Printed in Japan

音なし源捕物帳＝目次

第一話　光る闇……7
第二話　夜桜の涙……27
第三話　暗夜の花道……47
第四話　鶴の八番……67
第五話　〝さ〟の字殺し……87
第六話　遠い音……107
第七話　花嫁狂乱……127

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第八話　黄金の仏像……147
第九話　雨吹き風降る……167
第十話　賭けた浪人……187
第十一話　赤い初雪……207
第十二話　罪なお年玉……229
第十三話　藪入りの留守……249
第十四話　死の初伊勢……269
第十五話　梅の声……289

装幀・カット　三谷一馬
カバー撮影　木村寿一

音なし源捕物帳

笹沢 左保

岡っ引は手先ということで数人の子分を使っているが、そのほかに表向きは平凡な職業についていて、悪の世界の情報を提供する者を秘密裡にかかえていた。その情報提供者を、下っ引という。どこの誰が下っ引であるのか、世間はそれをまったく知らない。

第一話

光る闇（やみ）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

穏やかな正月だった。

晴天が続き、風もそれほど強くない。寒さは厳しかったが、明るい日射しが終日降り注いでいた。霜どけの道も、すぐに乾いた。松が取れてからも連日、雲一つない青空を見せていた。

江戸の人々は、穏やかな正月気分をたっぷりと、味わったはずであった。あまり正月が楽しくなかったのは、江戸で浅草の人々だけだったと言えるだろう。浅草では前年の文政二年の十二月二十五日に火事があり、大勢の人たちが焼け出されているからである。

羽根つきの音も、聞かなくなった。獅子舞いも、姿を消した。まだ青空に凧が浮かんでいるのは、子どもたちが正月気分の名残りを捨てきれずにいるからだった。

江戸の人々の、新しい年の生活が始まっていた。働くと同時に、遊ぶことも忘れない。正月の松の内はひっそりとしていた盛り場も、俄然いつものように賑わい始めた。

この文化・文政の時代で、江戸随一の盛り場はというと、それは両国であった。両国には江戸中の娯楽施設が、すべて集まっていた。誰もが両国へ足を向けた。

隅田川に架かる橋を、この時代では四大橋と呼んでいた。永代橋、大橋、両国橋、それに吾妻橋である。このうち本普請の橋は両国橋だけで、あとの三大橋はすべて仮普請の橋であった。

元禄十六年の大火のとき、無数の避難者が橋を渡りきれずに死傷した。その教訓から幕府では、両国橋と大橋の間の川沿いに大幅な防火線を設けた。

この隅田川沿いの幅広い空地が、大川端と呼ばれたところである。その後、両国橋の手前にも、火除地が作られた。それが両国広小路であった。

火の延焼を食いとめるための火除地だから、両国広小路に建築物を置くことは許されなかった。見世物小屋の仮設なども昼間だけであって、夜になればいちいち取り払わなければならない。

せっかく、盛り場になった両国広小路だが、これは不便で仕方がない。それではというので、向両国へ河岸を変えることになった。川向こうの両国である。

つまり本所側へ、両国橋を渡った川向こうの両国だった。そこが回向院を中心として、江戸いちばんの盛り場両国へと発展したのであった。

飲食店、見世物などが集まり娯楽の場所、歓楽街として凄まじいほどの繁盛ぶり、賑わいを見せていたという。

その両国の元町の居酒屋『春駒』が、また評判の繁盛

ぶりだったのである。もともと、凄まじいほどの盛り場という場所柄だから、客集めには不自由しなかった。
それに加えて『春駒』には、評判になるようなタネが幾つもあったのだ。まず、感じのいい店である。ほかの飲み屋に比べて、二割は値段が安い。
客ダネがばらばらで、あらゆる層の連中が飲みに来るから、かえって気楽に利用できる。そして女将のお小夜が、江戸小町などと言われるほどの器量よしだったのである。
『春駒』は、縄暖簾をくぐって薄暗い土間の席につく、といった類いの居酒屋ではなかった。間口が五間、九メートル以上ある店だから、かなり広かった。
入口には、水色に白く馬を染め抜いた飾り暖簾が、掛けてあった。店の中は明るくて、小綺麗で粋な造りだった。正面に町火消し五番組『や組』の、矢じりに駒形の纏が据えてある。飾り物であった。
銘酒屋のように、いかがわしい酌女は置いてない。二人の板前とお燗番の爺さん、ほかに五人ほどの若くて陽気な給仕女がいる。客に愛嬌を振りまくのは、もっぱら女将のお小夜であった。
お小夜は二十七、脂の乗りきった女盛りである。もう一、二年もすれば、大年増と言われる年ごろだった。見れば見るほど、いい女という評判であった。
確かに江戸広しといえども、めったにお目にかかれはしない美人である。粋で鉄火肌で、愛嬌があった。しかも、熟れきった身体からは、匂うような色気を放っている。
お小夜を目当てに来る客も、少なくはなかった。お小夜の形のいい尻に触れたり、煽情的な腰つきを掌で確かめたりする者もいた。だが、『春駒』の常連たちは、色気抜きでお小夜に接している。
お小夜の美貌を肴に、飲むだけで満足しているのだ。むしろ、お小夜の気性が好きで、常連になっている客が多かった。それにもう一つ、お小夜には男がいるということがあったからである。
その男、源太という。
お小夜と祝言を挙げたとは聞いていないので、夫婦でないことは確かであった。情夫ということになる。いつの間にかお小夜の情夫になって、『春駒』に住みついたという男であった。
「お小夜さんにも、ああいう酔狂なところがあったんだなあ」
「まったくだ。お小夜ほどの女が、もったいねえみてえな話よ」
「人は好きずきと言うが、男と女ってえのはわからねえもんさ」

「お小夜さんほどの女なら、もっと色男で頼もしくって金もあるって野郎を、選り取り見取りじゃあねえかい」
「どうして、あんな男がいいんだろう」
「蓼食う虫も、好きずきか」
「無類の床上手なんじゃあねえのかい」
「うん。野郎のお道具が、素晴らしく立派なのかもしれねえ」
「女の弱みは、そこにあるからなあ」
「夜、お床入りしてからの源太に、お小夜は惚れきっているんだろうよ。きっと……」
最初のうち『春駒』の客たちは、岡焼き半分にしきりとそんな話題に花を咲かせたものであった。だが、そんなふうに言いたくなるのも、無理はなかったのだ。
源太は二十九だという。図体ばかり大きくて、ドジで間抜けという感じであった。一見遊び人ふうだが、気の利いたことができるような男ではなかった。
月代を伸ばしているうえに、ひどく無精ったらしいのである。顔一面に、濃い無精髭を伸ばし放題なのだ。いつも、デレッとした着流し姿でいる。
着物の左袖を、肩口のところで結んでしまっていた。左腕が肩の付け根から、そっくりなくなっているのである。それで邪魔な左袖を、結んでいるのだった。
片腕の源さんなどと、呼ばれていた。定職は、持っていない。一応、『春駒』の亭主ということになっている。その亭主が一日中、店で飲んでいるのである。
『春駒』で、客の相手をするのは、お小夜だけであった。それでは退屈する客もいるだろうと、源太はみずから話し相手を買って出ているのだった。
つまり一日中、源太は店で客を相手に、飲んでいるのである。源太は気がいい男だし、相応の愛嬌もあって、話題が豊富であった。色気抜きの客たちにとっては結構、楽しくて面白い酒の相手になるのだった。
べつに客の酒を、飲むわけではなかった。源太専用の朱色の銚子があって、それを絶えず給仕女が運んで来る。銚子の中身は、客には出さない地酒だということだった。
身体が大きいせいか、源太は酒が強かった。一日中飲んでいても、乱れるほどには酔わなかった。声は小さいし、終日店にいても目立たない源太であった。
まあ、毒にも薬にもならない男だった。それでいて、酒の肴にもなるし、退屈凌ぎには恰好の話し相手である。それに気がいいから、人に憎まれることがない。
お小夜の情夫と知って岡焼き半分に反感を持つ男たちも、源太と話をしているうちに何となく心安い仲になる。気楽な飲み友だち、ということになるのだった。
しかし、繁盛している『春駒』だけに、店での揉め事は、どうにも避けられなかった。江戸いちばんの盛り場

両国には、いろいろな人種が集まって来る。
それに、酒がはいるのである。客同士の喧嘩だと、表へ出ろということになる。だが、店の者に文句をつけての揉め事となると、そうはいかなかった。
文政三年の一月十四日にも、『春駒』ではそうした騒ぎがあった。時刻は、間もなく暮れ六ツだった。両国界隈の飲食店の賑わいは、そのピークにさしかかっていた。『春駒』の店内も、ほぼ満員であった。その店内のざわめきを打ち消すように、突然けたたましい音が響き渡った。広い店内が、シーンと静まり返った。
中央の土間に、福寿草の鉢が叩きつけられたのである。砕けた鉢と、黄色い福寿草と泥が、土間に飛び散っていた。纏の脇の棚に、飾ってあった福寿草の鉢だった。
「ふざけるんじゃねえ」
静寂を破って、途方もなく大きい罵声が、店の中央で聞こえた。

2

いきり立つ男は、三人であった。いずれも人相のよろしくない連中で、無法者という看板をかけているような男たちだった。あまり、見かけない顔である。
腕まくりをして衿元を広げ、彫り物や白い晒を見せつけている。かなり酔っているようだが、足腰はしっかりしていた。徒党を組んでの、ならず者であった。
火消しの纏を背後にして、お小夜が突っ立っていた。顔色がやや青白く、緊張した面持ちであった。お小夜とその三人の男の間で、何かあったらしい。
「いやらしいとは、何て言い草だい！　それが客に向かって、口にする言葉かってんだよ！」
左腕に彫り物のある男が、お小夜に怒声を投げつけた。
「客商売じゃあねえかい。それも男に酒を飲ませて、おめえの色気で釣っているんだろうが！」
「生娘じゃあるめえし、それも愛想のうちってもんだ！」
あとの二人が、負けずに大きな声を張り上げた。
「いやらしいことをするから、いやらしいと言ったんですよ」
お小夜が気丈に、三人の男を睨みつけた。
「何を言ってやんでえ！　客に触られるのがいやだったら、奥に引っ込んでいりゃあいいだろう！」
左腕の彫り物を叩きながら、ひとりの男が前へ出た。
「そりゃあね、触るお客だって珍しくはありませんよ。確かに触らせるのも、愛想のうちでしょうよ。でもいくらお客だって、触ってもいい場所ってものを弁えてもらわなくっちゃね」

お小夜が、言い返した。
「てめえを何さまだと、思っていやがるんだよ！　おい……」
「客商売の女だと思って、甘く見ないでもらいたいですね」
「衿の奥へ手を突っ込まれるのが、そんなにいやなのかよ！」
「そんなことをするお客なんて、お前さんたちが初めてですよ」
「色男にはもっと触って、もっと強く揉んでとせがむくせしやがって、聞いたふうなことを吐かすんじゃねえ」
「とにかく、勘定はいりませんからね。さっさと、出てってくださいな」
「何だと……！」
彫り物をした男が、身体に触れ合わんばかりに、お小夜に接近した。お小夜は、後退した。だが、背中が棚にぶつかって、お小夜は動けなくなった。
「おれたちを、誰だと思ってやんでえ！　薬研堀の人足請負、天神一家の三羽烏と騒がれる留吉に弁次郎に浜造なんだぜ！」
彫り物の男が、お小夜の肩に手をかけて、激しく揺すった。鉄火肌のお小夜でも、そこは女である。もはや恐ろしさを、隠しきれずにいた。お小夜は顔色を変えて、大きくのけぞっている。
満員の客が総立ちになっていたが、口を出す者はひとりもいなかった。相手が、悪すぎるのである。薬研堀の天神一家については、詳しく知っていなかった。
しかし、薬研堀の人足請負に三人組の乱暴者がいるという噂は、何となく耳にしていたのである。その当の三人組に違いないと、客たちは察しをつけたのであった。
「おめえの色男を、ここへ出せ！」
「亭主は、いねえのかい！」
「さもねえと、この店をメチャメチャにぶち壊すぞ！」
三人の男が、凄味を利かせて喚き立てた。常連の客たちの目が、チラチラと動き始めた。何とはなしに、源太のほうを見ずにはいられなかったのである。
男たちが、亭主を出せと怒鳴っている。お前は一応、この店の亭主ではないか。何とかしてやらなければ、お小夜さんが気の毒だ。店をぶち壊されたら、どうするのだ。客たちの目はそういう意味で、源太に向けられているのだった。同情しながら、源太を促しているのである。その源太は、店の中央に近い席にいた。
源太は三人の男と、お小夜に背を向けるようにしていた。知らん顔でいるというより、目立つまいとして縮こまっていたのだ。すでに源太は、萎縮してしまっているのだ。

気の弱い源太がみずから、三人の無法者に立ち向かおうとするはずはなかった。客の大半が、そのことを承知していた。だから、源太に声をかけたりする者はいない。その代わり、源太のほうを盗み見るのであった。その何人かの客の目の動きに、彫り物をした男が気づいたようだった。三人のうちの兄貴分で、留吉という男らしい。

留吉は源太の後ろ姿に、視線を注いだ。源太もその視線の痛みを、背中に感じたのに違いない。源太は顔を伏せると、ますます小さくなったようだった。

「野郎が、亭主かい」

留吉はそう言うと、いきなりお小夜の頬に平手打ちを喰わせた。乾いた音があたりに響いて、お小夜がヒーッと悲鳴を上げた。客たちが一斉に、ハッとなった。

「おい、こっちへ出て来な。さもねえと、女の顔が化け物みてえになるぜ！」

弁次郎というノッポが、居丈高に源太に声をかけた。だが、源太は肩を震わせるだけで、動こうともしなかった。留吉が続けざまに、お小夜の顔を殴りつけた。

「助けて、お前さん！」

お小夜が、悲痛に叫んだ。

「この野郎、とぼけやがって……！」

もうひとりの浜造という男が、堪りかねたように、席の間に割り込んで来た。分厚い一枚板の食台が木の香も新しく、あまり間隔を置かずに取り付けてある。

腰掛けは普通の居酒屋だと、酒樽に板を渡したものを使っている。だが、『春駒』の場合は、ちゃんとした縁台式になっていた。そこに小さくて薄い座蒲団が、並べてあるのだった。

その腰掛けにも、客が詰め合ってすわっている。そうした食台や腰掛けの間に割り込んで来た浜造が、後ろから襟首に手をかけて引き倒したのであった。

「あっ……！」

源太は声を残して、腰掛けから土間へ落ち込んだ。源太の襟首を掴んで、浜造はずるずると土間を引きずって行った。源太は、ただもがくだけであった。

「亭主なら、亭主らしくしろい！」

浜造は中央の広い通路へ引っ張り出すと、その場に転がした源太の脇腹を思いきり蹴りつけた。

「この野郎！」

お小夜を突き放した留吉が近づいて来て、源太の顔を雪駄の裏で踏みつけた。弁次郎が源太の腹の上で、勢いよく跳躍した。弁次郎は、源太の腹の上に立った。

「ぎゃっ！」

源太は叫び声を洩らして、苦しそうに四肢をばたばたさせた。弁次郎はそのまま馬乗りになると、左右の拳で源太の顔を繰り返し殴りつけた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com